

# 平野秀吉旧蔵品とその目録について

楨田 善衛

## 一 はじめに

平野秀吉の名を聞いて、どのような人物であるかを思い浮かべる  
ことのできる人は少ない。氏を知る手がかりは、一九七一（昭和四  
十六）年十一月一日に巻町役場が発行した『平野秀吉』によるのが  
よい。副題は「師父と仰がれた篤学の人」と記されている。著者は「小  
泉孝」。小泉氏は著書『平野秀吉』のあとがきに「平野秀吉先生は恩  
師であり、私たちの媒酌人であり、三人のこどもたちの名付親」と  
記す。氏は平野秀吉の身近にいた人物といえる。小泉氏の経歴等は、  
「平野秀吉の遺墨と落款の特徴——小泉孝旧蔵品を中心に——」を参考に  
してもらえるとありがたい。氏は新潟県を代表する小学校教師の一  
人である。

一九八二（昭和五十七）年五月二十五日発行の『広報まき第三八  
八号』には、「平野秀吉先生顕彰展」の開催の記事がある。この記事  
によれば、「顕彰展は去る四月二十二日、ご遺族の平野不二夫氏と著  
作原稿の保管者である小泉孝（上越市在住）氏の御両名により、「全  
釈万葉集昭和略解」を含む万葉集研究原稿や歌稿等が一括に寄贈さ  
れた事を記念して行われた」とある。展示品は「全釈万葉集昭和略  
解ほか受贈原稿」「書跡、短歌条幅、屏風、色紙」「著作刊行物」「写真、  
履歴書その他」とあり、開催期日等は「五月三十日～六月六日（五  
月三十一日）（休館）、巻町郷土資料館特別展示室（2F）」とあった。  
このように、一九八二（昭和五十七）年当時、平野秀吉は旧巻町の  
みならず、近隣に名の知れた万葉集研究者と考えてよい。

数年前から平野秀吉のご親族は、「平野秀吉先生顕彰展」で展示さ  
れた資料を含む平野秀吉旧蔵品などの取り扱いについて、検討を重  
ねてきた。かつて「平野秀吉先生顕彰展」が開催された、平野秀吉  
の生まれ故郷である旧巻町、現在の新潟市西蒲区に寄贈するのが最  
善であるとの結論に至った。そしてご親族は、寄贈品の受入場所に  
ついて、かつて顕彰展が開かれ、すでに平野秀吉に関する寄贈を受  
け入れている新潟市巻郷土資料館を望んでいた。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、ご親族による寄贈品の  
運搬・搬入の時期は遅れたものの、令和三（二〇二一）年十一月四日に、  
新潟市巻郷土資料館に搬入され、寄贈の手続きは完了した。

本稿では、平野秀吉の略歴ならびに人物史的な価値、寄贈目録と  
寄贈品の価値を明らかにすることで、郷土の偉人平野秀吉の顕彰に  
資することを目的とする。

## 二 平野秀吉の略歴

平野秀吉の人物史の研究は、『平野秀吉』が刊行された後に進展し  
た。現時点で知りうる平野秀吉の略歴について、次に示す。なお、  
ここで示した略歴は、「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等女学  
校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長齋藤秀平」<sup>3</sup>から引用した。

一八七三（明治六）年生まれ。

一八七九（明治十二）年巻小学校（現新潟市立巻南小学校）入学。

一八八六（明治十九）年巻小学校卒業。一八八五（明治十八）年

巻小学校授業生。

一八八七（明治二十）年巻小学校を退職、国上小学校授業生。

一八八八（明治二十一年）年弥彦小学校授業生。

一八九〇（明治二十三）年十一月一日尋常科教員免許状受領。

一八九一（明治二十四）年灰方尋常小学校訓導兼校長（十八歳）。

一八九二（明治二十五）年三月高等科教員免許状受領。同年八月東京において大日本教育会の一ヶ月にわたる夏期講習会受講。同年九月二十七日内野尋常小学校。同年十二月二十七日新制の小学校本科正教員免許状受領。

一八九五（明治二十八）年七月十六日「実用文典」出版。文部省検定試験合格、尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の国語科教員免許状受領。同年九月十三日新潟県尋常中学校授業嘱託。

一八九六（明治二十九）年二月二十五日同校助教諭。

一八九八（明治三十一）年六月三日文部省検定試験合格、尋常師範学校、尋常中学校、高等女学校の漢文科、習字科教員免許状受領。

一八九九（明治三十二）年二月十日新潟県尋常中学校教諭。

一九〇〇（明治三十三年）三月二十二日富山県第三中学校（現富山県立魚津高等学校）教諭。

一九〇一（明治三十四）年四月八日新潟県高田師範学校教諭。

一九〇二（明治三十五年）年十二月二十八日「国語声音学」出版。

一九〇四（明治三十七）年三月十二日高田師範学校舎監兼任。

一九一五（大正四）年五月十五日「綴り方教授の根本的研究」。

一九一九（大正八）年三月二十八日高等官六等待遇。

一九二一（大正十）年八月五日高等官五等待遇。同年八月六日同校依願退職。同年九月三十日叙勲六等瑞宝章授与。同日高田師範学校授業嘱託。

一九二三（大正十二）年八月「万葉集全釈」第一次原稿脱稿。

一九二四（大正十三）年十月三日新潟県史跡名勝天然記念物調査委員。

一九二七（昭和二）年七月十五日「日本アルプス登山案内記」出版。

一九二八（昭和三）年十月二十日「山嶽歌集駒草」出版。

一九二九（昭和四）年十月十日「唐詩選全釈」出版。

一九三四（昭和九）年三月三十一日高田師範学校授業嘱託依願退職。同年十月十七日高田師範学校卒業生による胸像除幕式ならびに謝恩会。

一九三九（昭和十四）年六月十日「山嶽の歌高嶺いばら」出版。

一九四三（昭和十八）年胸像供出。同年十二月「全釈万葉集昭和略解」完稿。

一九四七（昭和二十二年）五月二十七日脳溢血にて倒れ、同日死亡。

同年十月五日「良寛と万葉集」出版。同年十二月「良寛と万葉集」出版記念講演会。

一九五一（昭和二十六）年三月十九日胸像再除幕式。

### 三 平野秀吉の人的な価値

平野秀吉の人物史研究のはじまりは、小泉孝が「新潟県人物百年史統領城編」<sup>4</sup>著した「師父と仰がれた篤学の人 平野秀吉」の小論にある。ここに加筆出版したのが前述の『平野秀吉』である。

この数年にわたり、平野秀吉人物史研究が進展し、平野秀吉に関する新たな事実が発見され、発表されている。例えば、新潟尋常中学校に勤務していた平野秀吉と生徒會津八一の関わり（師弟関係）<sup>5,6</sup>、一九二八（昭和三）から一九三七（昭和十二）にかけて相馬御風に送った手紙とその内容<sup>7</sup>、新潟県を代表する郷土史家斎藤秀平との関わり（師弟・同僚関係）<sup>8</sup>、新潟県内の旧制小中学校における校歌（三条高等学校等）作詞者としての活躍<sup>9</sup>などである。平野秀吉が学んだ巻小学校の沿革誌の記載から、平野秀吉を教授した教員（訓導、授業生）を特定し、明治十年代の巻小学校における教育のあり様を明らかにするとともに<sup>10</sup>、萩原貞（旧長岡藩藩代官、巻小学校初代校長）や新保西水（峰岡藩藩校大教授、新潟師範学校教諭、旧西川町出身）

新保寅次（旧制山口高等学校長、旧西川町出身）との関わりが明らかとなった。さらに『平野秀吉』を著した小泉孝の履歴や平野秀吉の落款等の整理、平野秀吉著作物の一覽<sup>11</sup>もまとめられている。

今後継続的な調査研究には必要ではあるが、平野秀吉のライフワークであった万葉集研究については、久松潜一（万葉集研究者、中西進は教え子の一人）から高い評価を得ており（小泉孝との書簡による）、平野秀吉の万葉集研究者としての在り方と生き方を、広く周知していく必要があると考えられる。

#### 四 寄贈目録と寄贈品の価値

寄贈目録は図表のとおりである。具体的には、書籍七点、火鉢一点、勲章一点、硯等一点、印章六点、木箱三点、写真帳一点、短冊一点、色紙二点、用紙一点、封筒（メモ）一点、笏一点、琴（八雲琴）一点、掛軸八点の合計三十五点である。

目録の中には、谷文晁の絵、伊藤仁斎、大谷句佛の書（為書き）、斎藤茂吉の歌（平野秀吉を詠んだ歌、斎藤直筆の書）、山元春舉の「駒草の絵」や、良寛の書（浅田壮太郎による寄附）、平野秀吉の書などがある。

小泉孝が著した『平野秀吉』で使用された資料や、平野秀吉自身が著書で用いた図等も含まれており、平野秀吉の人となりを知る上で、欠くことのできない一次資料といえる。

寄贈品それぞれに関する調査研究が進むにつれて、その価値が明らかになるとともに、平野秀吉の人物史を知るうえで重要な手掛かりになると考えられる。

#### 五 おわりに

平野秀吉旧蔵品の新潟市寄贈については、平野秀吉のご親族のみ

なさんのもとより、江端完治氏（巻良寛会の現会長）、坂井弘氏（巻良寛会の前会長）のご尽力によるところが大きい。本稿をまとめるにあたり、新潟市巻郷土資料館から貴重な写真と情報の提供を受けた。さらに、明星大学教授の廣嶋龍太郎先生には親切なる指導と励ましの言葉を頂くとともに、私の拙い文章を読み、ご教示を賜った。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

#### ※参考文献

- 1 小泉孝「巻町双書第十七集 平野秀吉」巻町役場1971.94p.
- 2 横田善衛「平野秀吉の遺墨と落款の特徴―小泉孝旧蔵品を中心に―」岡村鉄琴『新潟県文人研究』第二十三号、越佐文人研究会 2020.p.188-206.
- 3 横田善衛「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等学校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十九号、越佐文人研究会 2016.p.148-163.
- 4 小泉孝「師父と仰がれた篤学の人 平野秀吉」、新潟県上越人物史研究会編『新潟県人物百年史 続頸城編』新潟県上越人物史研究会 1968.p.289-305.
- 5 横田善衛「平野秀吉の偉業と会津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十六号、越佐文人研究会 2013.p.48-59.
- 6 横田善衛「会津八一と恩師平野秀吉」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十七号、越佐文人研究会 2014.p.31-44.
- 7 横田善衛「平野秀吉と相馬御風の交流」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十七号、越佐文人研究会 2014.p.45-52.
- 8 横田善衛「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等学校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十九号、越佐文人研究会 2016.p.148-163.
- 9 横田善衛「平野秀吉が作詞した校歌と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第十八号、越佐文人研究会 2015.p.153-173.
- 10 横田善衛「平野秀吉が学んだ巻小学校と恩師萩原盤根・井上幹二郎」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第二十一号、越佐文人研究会 2018.p.232-253.
- 11 横田善衛「平野秀吉の著作目録と著作物の特徴」、岡村鉄琴『新潟県文人研究』第二十四号、越佐文人研究会 2021.p.167-178.



図 1



図 2



図 3

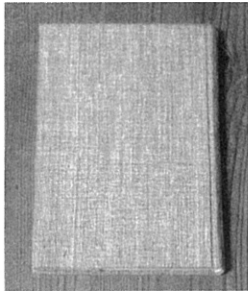


図 4

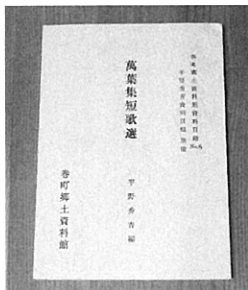


図 5



図 6



図 7

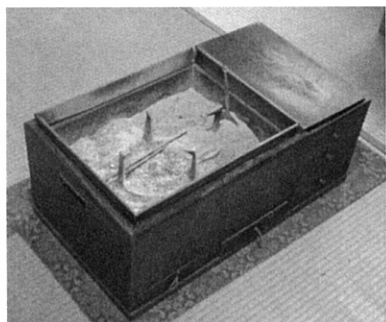


図 8



図 9

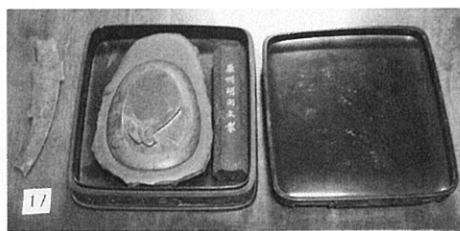


図 10



図 11

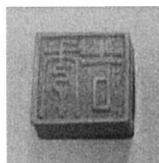


図 12



図 13

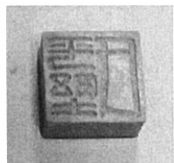


図 14



图 15

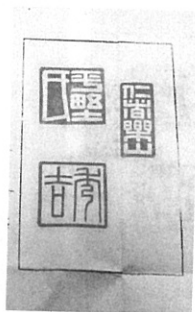


图 16



图 17-a

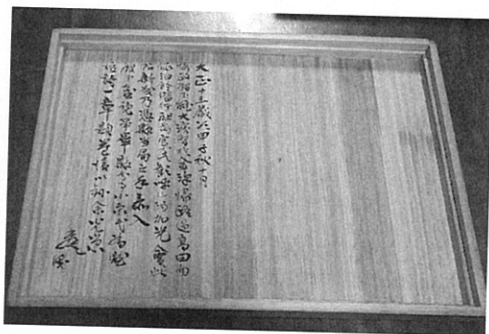


图 17-b

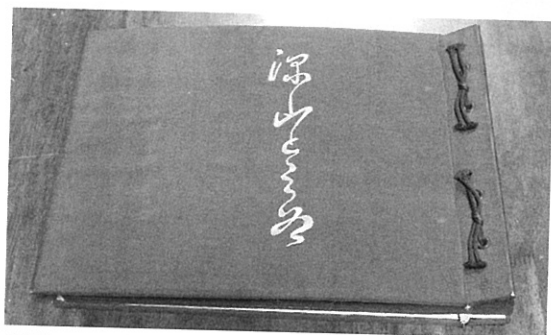


图 18

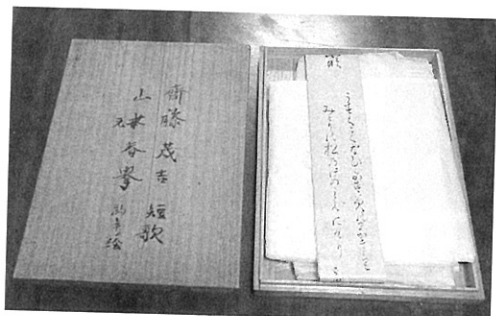


图 19

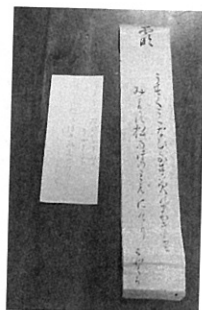


图 20



图 21



図 22



図 23



図 24



図 25



図 26

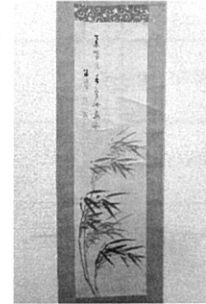


図 27



図 28



図 29



図 30

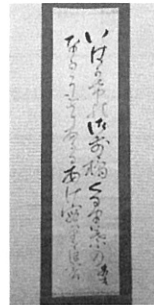


図 31



図 32

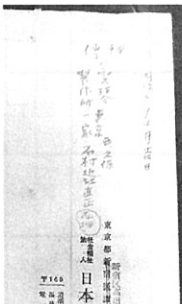


図 33



図 34-a



図 34-b

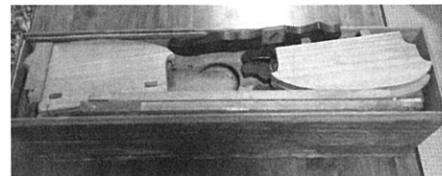


図 35

## 寄 贈 目 録

番号	種別	資料名	実寸法 (cm) 縦×横×高	点数	備考	図
1	書籍	平野秀吉著良寛と 萬葉集文理書院	19.5×14.0×2.5	1	良寛選萬葉歌、「秋の野」の評釈。	図1
2	書籍	平野秀吉著良寛と 萬葉集文理書院	18.5×13.0×0.8	1	短歌入門、良寛選萬葉秀歌、秋の野の鑑賞。	図2
3	書籍	平野秀吉著 山嶽歌集駒くさ 東京斯文書院版	17.5×12.5×1.5	1		図3
4	書籍	平野秀吉著 山嶽の歌 第二集高嶺いばら	18.5×13.0×2.3	1		図4
5	書籍	平野秀吉編 萬葉集短歌選 巻町郷土資料館	21.0×14.8×0.5	1		図5
6	書籍	平野秀吉先生遺著 全釋萬葉集 昭和略解総論	25.3×17.5×0.3	1		図6
7	書籍	平野秀吉先生遺著 全釋萬葉集 昭和略解巻一の一	24.8×17.8×1.5	1		図7
8	火鉢	火鉢	35.0×64.5×28.0	1	巻の大工（秀吉の父）が作った火鉢。	図8
9	勲章	勲六等瑞宝章	10.0×6.3×2.0	1	平野秀吉	図9
10	硯等	硯	24.0×21.0×6.5	1	ケース、硯、炭、魚津中学校の文鎮。	図10
11	印章	勝田志庵木印外帙	13.5×23.0×6.5	1		図11
12	印章	勝田志庵木印左	3.5×3.5×4.5	1	陽刻「秀吉」	図12
13	印章	勝田志庵木印中央	4.5×1.8×4.5	1	印刻「仁者楽山」関防印	図13
14	印章	勝田志庵木印右	3.5×3.5×4.5	1	印刻「平野氏」	図14
15	印章	勝田志庵木印陰影 本紙	23.0×13.0	1		図15
16	印章	勝田志庵木印封筒	18.0×7.5	1		図16
17	木箱	榮光帖（箱）	26.4×35.0×6.0	1	箱裏書あり。深山三谷と称する写真アルバム帖あり。昭和天皇が皇太子時代台覧したとある。	図17 -a.b
18	写真帖	深山三谷	23.5×32.8×5.5	1	写真の注釈は平野秀吉が行ったものと推察される。	図18

番号	種別	資料名	実寸法 (cm) 縦×横×高	点数	備考	図
19	木箱	齋藤茂吉短歌 山本春拳駒草の絵 (箱)	32.0×21.0×3.3	1	短冊、絹本色紙、絵本、原稿用紙(裏張り有)が収まる。	図19
20	短冊	短歌うすくこく… ことち	33.5×6.0	1	短冊。 「うすくこくなひ(び) くかすみのまがきより みと(ど)りの松の ほのみえにけり ことち」	図20
21	色紙	駒草の絵山本春拳	21.2×18.0	1	絹本色紙。	図21
22	色紙	和歌ひのこる… 秀吉	23.0×14.5	1	色紙。 「言ひのこること一つある心地して、 今年も山をおりけるかも。」「駒草」収録 p.18。	図22
23	用紙	齋藤茂吉歌序 昭和戊寅初夏 [13 (1938) 年]	22.3×15.5	1	箱材に原稿用紙を貼りこむ。『高嶺いばら』収録。	図23
24	掛軸 (長いもの)	大谷句佛一行書	外箱 61.5×8.0×7.5 表具 190.5×46.2 本紙 127.0×34.0	1	「終始一誠為平野氏為句佛書」	図24
25	掛軸 (長いもの)	賢人図	外箱 62.5×7.8×7.3 表具 175.5×44.2 本紙 101.0×32.9	1		図25
26	掛軸 (長いもの)	伊藤仁斎一行書	外箱 47.8×8.6×9.5 表具 191.0×39.3 本紙 131.5×28.4	1		図26
27	掛軸 (長いもの)	明朱鸞画墨竹	外箱 49.8×7.5×6.3 表具 184.0×40.6 本紙 105.6×27.5	1		図27
28	掛軸 (短いもの)	良寛上人短歌	外箱 66.5×9.0×9.3 表具 127.0×56.8 本紙 34.0×44.1	1	「来丁見礼・・」、浅田壮太郎より受く。	図28
29	掛軸 (短いもの)	萬歳の図谷文晁	外箱 66.7×7.8×7.2 表具 139.2×57.4 本紙 52.0×45.7	1		図29
30	掛軸 (長いもの)	妙高の残雪を よめる長歌 平野秀吉書	外箱 62.0×7.4×7.4 表具 193.5×54.7 本紙 136.0×49.8	1	木印印刻「秀吉」使用。	図30
31	掛軸 (長いもの)	平野秀吉和歌一首	外箱 51.3×8.3×7.5 表具 195.3×42.5 本紙 134.9×31.9	1	「いはか希(け)の御前橋、くる満(ま)葉のなかに しげりあけ実(み)満(ま)そは実」 『高嶺いばら』収録 p.212。	図31
32	木箱	八雲琴	外箱 66.5×17.0×20.2	1	封筒、笏、琴が収まる。	図32
33	封筒	八雲琴封筒	20.6×9.0	1	平野不二夫のメモ。 「明治三年十月吉日 傳神八雲琴 東京西久保 製作所一家 石村近江正直(花押)」	図33
34	笏	八雲琴笏	33.4×6.3×0.8	1	墨書。表「源家音曲乃元祖宇多天皇第八乃皇子式部卿 敦實親王乃柏木乃木土を以夫造」。 裏「明治四年辛未五月日 城原神主従五位日野資計」	図34 -a,b
35	琴	八雲琴	未計測	1	『角海浜の民具』p.73に掲載。 『八雲琴の調べ』によれば、その伝承は限定的。 『角海浜』との関連について、調べる必要あり。	図35